

JSA福岡支部核問題研究会

予備と福岡市科学館でのスライド
九州沖縄シンポ
(12月11日)

気候変動と民主主義

もう一度戻って説明する。

伊藤久徳(元九州大学・**気象学**)

1. はじめに

2. これまでに創られてきた新しい仕組み

2021年12月18日

- (1) 科学に基づいた政治が行われる仕組み—**IPCC**の例
- (2) 非政府組織が国際交渉の場に不可欠である仕組み—**COP**の例
- (3) 抽選制民主主義という仕組みの芽生え—**気候市民会議**の例

3. 地球の未来のための新しい民主主義試論

- (1) 地球の未来を考えるための構成員
- (2) 未来も含めた地球の構成員による民主主義の可能性と具体化
- (3) 「弱者」を主語・主体にする意義
- (4) 未来も含めた地球の構成員による民主主義の実践的意味

4. まとめ

1. はじめに

- ・ IPCC 第1作業部会 第6次評価報告書 2021年8月
「人間の影響が大気，海洋及び陸域を温暖化させてきたことには疑う余地がない」
→人間が**気候危機**をつくりだし，「自然の生態系及び人類に悪影響を及ぼ」（気候変動枠組条約）している。 **地球全体**
- ・ 私の問題意識
 - (1) 気候危機は（自然科学的にはもちろん）**社会科学的にも地球全体の視点**から捉えないといけない。
 - (2) 気候危機は科学的に**未来から現在を捉えよう**とする初めての問題
100年の時間スケール シンボリックな意味
- ・ 要約：気候危機は真に新しい問題 50年でも200年でもよい
100年というスパンで地球全体を考える！

新しい問題 → 対処には新しい仕組みが必要

社会全般に関わるが、ここでは

民主主義とはどのようなものなのか

包括的にではなく、仕組みについてのみ

仕組みの意味：以下の各節で説明

どのような仕組みであれ、ネガティブな面が必ず付随するが、
(本発表の趣旨から) そのような面には言及しない。

第2節 気候危機に関して民主主義の新しい仕組みが創られつつある。
→3点にわたって論じる。

これらの仕組みは気候危機という言葉が使われる以前から継続するものなので、タイトルと以下では「気候変動」を用いる。

第3節 今後考えるべき民主主義の新しい仕組みを提案・考察



2. これまでに創られてきた新しい仕組み

仕組み：人民主権を具質化する、広い意味での政治の様組みのこと

(1) 科学に基づいた政治が行われる仕組みー IPCCの例

IPCC(政府間組織)の組織

IPCC総会 政府代表

WG1 自然科学的根拠

WG2 影響, 適応, 脆弱性

WG3 気候変動の緩和(策)

WG: 作業部会 科学者

(各国政府による推薦)

報告書の種類と採択

各WG評価報告書(AR)

SPM, 技術的要約, 本文(個別章)

各WG総会で審議・採択

SPMの承認と本文の受諾

承認: line-by-lineでの議論と同意

統合報告書

SPM, 本文(個別主題)

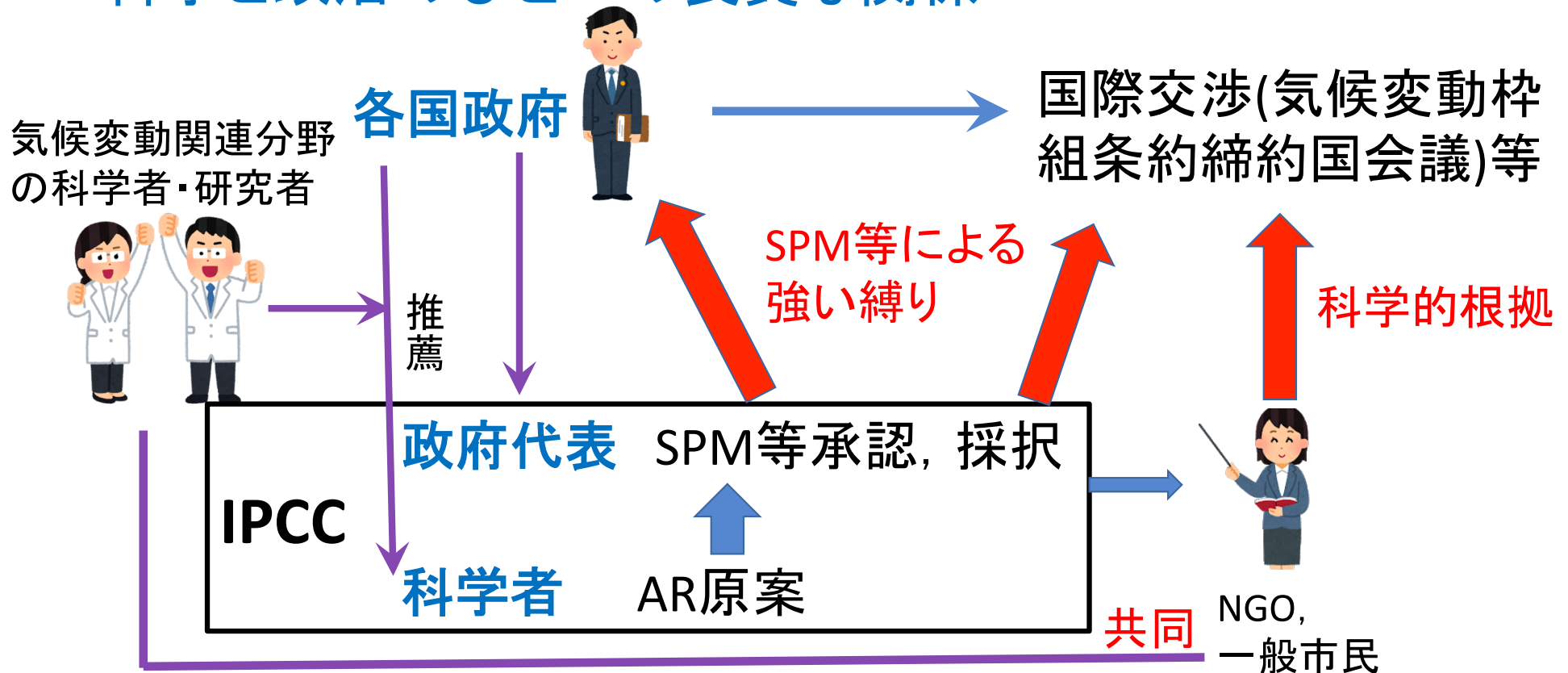
IPCC総会で審議・採択

SPMの承認と本文の採択

SPM: 政策決定者向け要約

科学と政治のひとつの良質な関係

絵のジェンダーには
目をつぶってください



政治 外形の ↔ 科学 実質的 → 科学に基づいた政治

なぜIPCCは科学と政治の良質な関係を保障する組織として設立され、それが継続しているのか？

当事者としての立場: IPCC初代議長 Bolin, B. 2007: A history of the science and politics of climate change – The role of the Intergovernmental Panel on Climate Change, Cambridge University Press.

俯瞰的な立場: 米本昌平, 2011: 地球変動のポリティクスー温暖化という脅威, 弘文堂

(1) IPCC(1988)が政治の舞台であるCOP(1995)より先に設立

- ・気候変動に対する科学的な評価が何よりも優先され、それには最良の科学者をIPCCに迎え入れるための組織という側面が強く意識
- ・その組織形態のもとで、第1次ARの発行(1990)もCOPに先行するという実績

(2) COP開催以降もその傘下に入らなかったこと

- ・政府代表がIPCCを(外形的であるにせよ)統治しているという形態

(2) 市民団体(非政府組織)が国際交渉の場に不可欠である仕組みーCOPの例

1992年 環境と開発に関する国際連合会議

「気候変動に関する国際連合枠組条約」(UNFCCC)採択→1994年発効

略称「気候変動枠組条約」

1995年から毎年(2020年を除いて) **COP(気候変動枠組条約締約国会議)**開催
第**1**回 → COP**1** UNFCCC/COP

COP3(1997年) 京都議定書, COP21(2015年) パリ協定

COP26(2021年) グラスゴー気候合意

内容は触れない

以下は主に Nikkei Style (2021)による

非政府組織(NGO: NonGovernmental Organization)が**多数参加**

オブザーバー参加権を持つNGOの数は2360(2019年)と, **20年で6.3倍**に増加
→飛躍的な存在感と発言権

→質的な新しさ

NGOの役割

- (1)政府とは別の視点を反映した解決策を探ること
- (2)国際交渉の現状を正しく伝えること
- (3)世界の耳目を集めること(大規模イベントやパフォーマンス) など

(1)の例 利害が激しく対立する場合での論点整理や多数派工作の手伝い
パリ協定の採択においては、欧州連合と島国連合が手を組んだことで局面打開
←国際NGOの橋渡し

(2)の例 複雑で多岐に亘る会議内容についての的確な情報提供
なぜならNGOが長くCOPを追い、その歴史に精通しているので
→一般のメディア担当者が正しい情報を読者に提供

(3)の例 気候行動ネットワーク(国際NGO連合体)による「化石賞」
交渉や対策に後ろ向きな国に対応を促す目的

日本受賞→日本で大きく報道→多くの国民が日本政府の後ろ向きな姿勢を認識
政府機関だけでは到達できない高みをNGOの媒介によって到達
→ 民主主義の新しさ

(3) 抽選制民主主義という仕組みの芽生え －気候市民会議の例

三上直之 2020: 気候変動と民主主義: 欧州で広がる気候市民会議, 世界, 933(2020年6月号), 174-183.
レイブルック, D. V. (David Van Reybrouck), 2019: 選挙制を疑う (訳 岡崎晴輝, ヴァンオーヴェルベーク, D.),
法政大学出版局, pp.244 (オリジナル2013年, 改訂2016年) によっている。

選挙型代議制



抽選制

具体的にはいわゆるミニパブリックスと総称されるもの(「公共の縮図」)など

- ・民主主義を謳う国家や地方自治体のほぼすべてが採用している制度
- ・民主主義における普遍的な制度であると思いついでいる
- ・これが機能不全に陥っていること, 歴史的には必ずしも普遍的ではない

階層を代表するような形(年齢や学歴などで**代表者を抽選をもとに選出**し, 彼らが政策課題に対応するという制度

- ・市民感覚に基づいた政策提案を行い, 具体的な政策に活かす
- ・参加した市民の今後の政治参画へのハードルを下げ, 主体的で継続的な政治参画への道を拓く

気候変動問題に対しても広範に適用

一般に気候市民会議

フランス 2019.10～2020.6 政府主催 150人

政策提言 149項目

→ 提言を反映した法案作成, 国会提出 (その後?)

イギリス 2020.1～2020.? (新型コロナ) 議会下院主催 110人

その他スペイン等, また多くの自治体レベル

日本

札幌 2020年「気候市民会議さっぽろ2020」 20人 4回 専門家11人 報告書

川崎 2021年「脱炭素かわさき市民会議」 75人 提案「2050 年脱炭素かわさきの実現に向けて」

・気候変動問題での合意形成のひとつの手段

「票になりにくい」→代表制民主主義の不調

・抽選制民主主義という代替制度の認知・進展

気候変動問題は社会全体の刷新と共に, そのひとつの民主主義の刷新として¹⁰

3. 地球の未来のための新しい民主主義試論

気候変動：**地球の未来**に対していかに**対処するか**という問題

「対処する」：「考える, 決める, 措置する」などの総称

どのようにすれば, それに**民主的に**対処したと言えるだろうか？

→その**仕組み**の考察

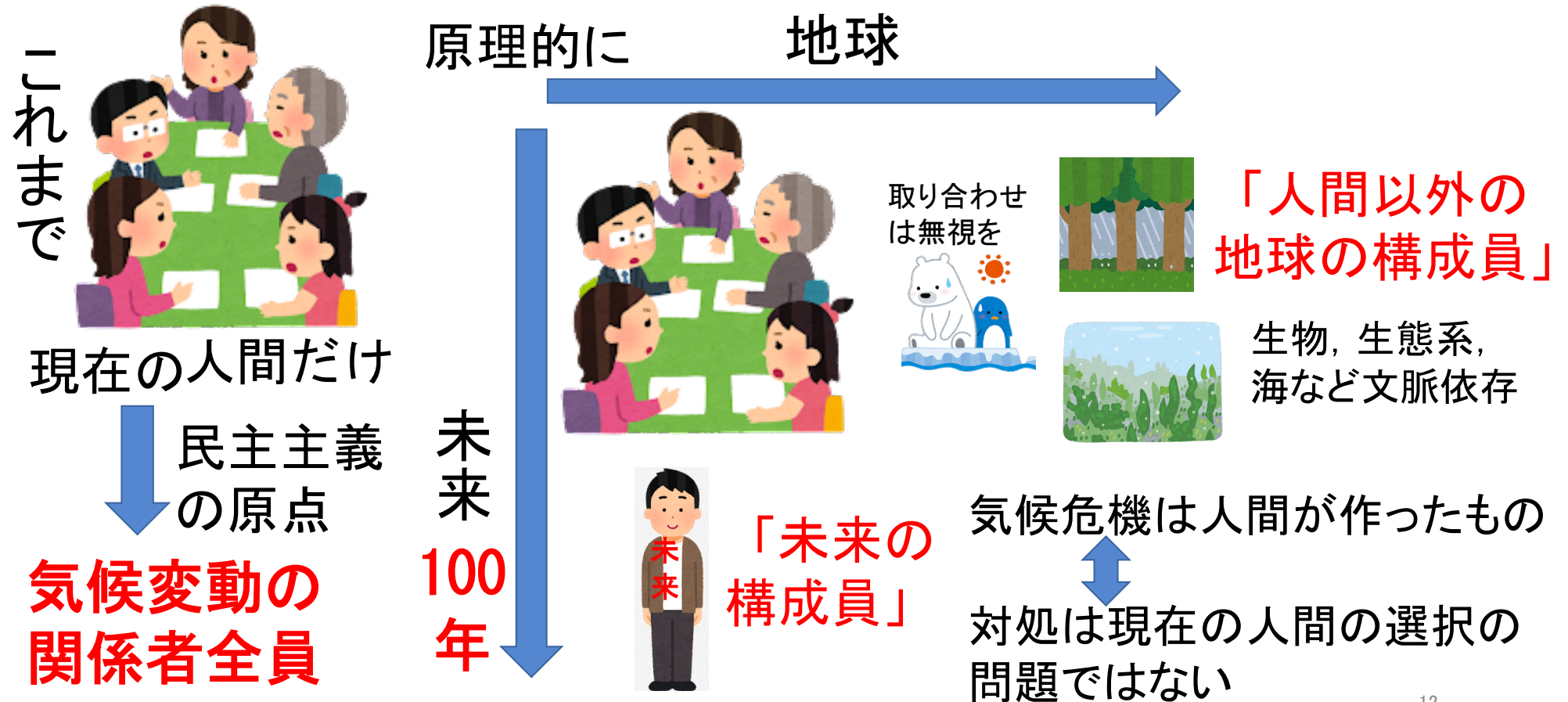
まだまだ不十分な考察に留まっており, アイデアのレベルに過ぎない。

多くのご意見・ご批判を

ワークショップなどの場での実践も求められている。

- (1) 地球の未来に対処するための**構成員**
- (2) 未来も含めた地球の構成員による民主主義の**可能性と具体化**
- (3) 「**弱者**」を主語・主体にする意義
- (4) 未来も含めた地球の構成員による民主主義の**実践的意味**

(1) 地球の未来に対処するための**構成員**



「未来の構成員」 (以降は「未来の人間」で代用する)

せいぜい10年先までの問題 (これまでのほぼすべての社会的な問題)

現在に生きている人間だけでものごとに対処するというフレームが整備

100年先までの問題 (気候変動問題)

生きている人間がまったく入れ替わる→現在の人間だけで対処すべきではない
→新しいフレームを作り上げる(「未来の構成員」を含めることから始まる)

- ・あり得る批判 「未来の構成員」を含めるのは問題が多い
∵未来がどうなるかに依存するが、それが分からない、含める意味が認められない。
- ・反論 気候の未来は、ある**温暖化シナリオ**を辿ればこのようになることが科学的に提示
→不確かさはあるにしても基本的に選択の問題
→「未来の構成員」は十分に想定可能

注:問題を単純にするため、現在の人間のなかの格差(南北問題など)は捨象し、
現在の人間を一括りにして考察  **気候正義**として重要

(2) 未来も含めた地球の構成員による

民主主義の**可能性と具体化**  原理的に「構成員」

「人間以外の構成員」や「未来の人間」がどのように関われるのか？

「人間以外の構成員」

無理ではないか？

例えば「子どもの権利条約」の決められ方

意見や権利の表明が困難な人がその表明ができず、権利を行使できない状況にあるとき、それを代弁・擁護し、権利の実現を支援する機能を**アドボカシー**，代弁・擁護者を**アドボケイト**とよぶが、そのシステムを用いることができる。

具体的な場：気候市民会議など

そこに**「人間以外の構成員」のアドボケイト**が参加

「人間以外の構成員」の意見や権利がどのようなものなのか？

まったく任意なものであってはアドボケイトの意味がない

- **意見のベース** IPCCのAR(引用文献を含む)やそれに類するもの
(以下,「意見の根拠資料」)

「人間以外の構成員」についても科学的に書かれているから

→対象が狭く捉えられており, 内容も十分ではないので, より包括的な研究が必要

- **意見表明** 意見の根拠とは別物

意見表明とは, **構成員が主語・主体**になること

権利はそもそもそう

科学的記述では「人間以外の構成員」を客観視する立場から書かれているので,
その記述の仕方を転倒

構成員が主語・主体になり, 構成員にとっての環境(人間を含む)を客観視

人間とは見えている世界が違う！

本提案のポイント

アドボケイトによる主観化の問題

否定的に捉える必要はない。現在の人間の意見も客観的な資料に依りながらも、基本は主観的なものであるから。

「未来の人間」

- ・未来の人間はそれぞれのシナリオを代表→
その立場からの意見表明

排除できるシナリオ(温室効果ガスの高排出シナリオ)は除いてよい。

不確かさを考慮すると少し複雑になるが、原理的には可能

- ・意見の根拠:「意見の根拠資料」

シナリオ毎に不確かさの幅を示しながら、未来の人間を取り巻く環境が提示されている。

- ・「未来の人間」が主語・主体

現在の人間とは見えている世界が違う！

コスト・ベネフィット分析

割引率(将来のものの価値を、現在価値を基準にした場合に割り引いて考える)

「人間以外の
構成員」と同じ



話の流れからずれるが、

「人間以外の構成員」・「未来の人間」を主語・主体に →

(3) 「弱者」を主語・主体にする意義

私が福岡市科学館に勤務していた時(2017年～2020年)に、

「市民を主語に」という取り組み

「人が育つ」科学館と規定し、理念でそれを敷衍し、企画書等もそう書くように統一



大阪市立大空小学校

「子どもを主語に」

出典: 樺山美夏 HUFFPOST 2020.1.18

校則なし、先生の残業なし、
発達障害児や不登校だった子

初代校長 木村泰子氏
インタビュー

市民	科学館	科学館職員
子ども	教育	教員

「市民を主語に」と「子ども
を主語に」の共通点

「弱者」

「強者」

「『弱者』を主語に」

非対称構造のもとでの



「弱者」

被災者

女性

マイノリティー

障がい者

...

災害

ジェンダー

社会問題

障がい者問題

...

「強者」

その他

男性

多数者

「健常者」

...

「『弱者』を主語に」のご利益は？

例1: 大空小学校

- ・ **子どもを主語に変えたら** 本当に変わります。**主語を先生から子どもに変える**ことで、何をしたらいいかが明確になり、...
- ・ 「先生のいうことを聞かない子どもがいて先生が困っている」ではなく、「子どもが困っている」
- ・ 「先生がどうしたいか？」ではなく、「困っている子どもたちがどうしたいか？」を考える。
- ・ 大切なのは、子どもを変えようとするのではなく、大人の自分たちが変わることに。
そうすれば、子どもだけでなく教職員も保護者も地域の人、みんなが安心して学び合える空気ができます。そこから豊かなものが生まれてくるんです。これこそが本当の学びです。

例2: 被災者

「『弱者』目線で考える」とよく言われるが、どうか？

(1)被災者に寄り添う。

被災者・被災地に食料品の支援を中長期的に行なう。 肯定？

地元の食料品・飲食店などの立場や被災地の自立の観点からは？ 間違い

主語が「強者」なので間違った。被災者を主語に

(2)被災者が思っていることに寄り添う。＝被災者の思いに寄り添う。

- ・絶対に「かわいそう」だけの発想にはならない。
 - ・被災地の自立を必然的に考える。
- } 間違わない(間違いにくい)

その他の例

学生 大学教育 教員 「学生を主語に」 シラバス, 目標

市民 科学 科学者 「市民を主語に」 科学コミュニケーション

(学生を)未来を担う人材として育成・・・ (多くの大学の目標)

学生が未来を切り拓く力を・・・

「『弱者』を主語に」の社会的意味

「強者」 持てる者

「世界」は基本的にこちらの論理・常識で成り立ち、我々は日常的に刷り込みを受けている。認知・思考の枠もこれで支配されている。

「弱者」 持たざる者

排除されているので、「強者の論理・常識」は「世界」を正しく表現できていない。

どのように正しい「世界」に接近できるか

- ・障がいの社会モデル
- ・インクルーシブ・デザイン
- ・「弱者」を主語に 「強者の論理・常識」から自由な「世界」

認知・思考や文章の終わりまで一貫 → ぶれない（「弱者」目線との違い）
普遍性



◆社会モデルにおける障がいとは？ 「世界」を俯瞰

●障害者差別解消法 ×「医学モデル」 「強者の世界」 ○「社会モデル」 ●この社会モデルによると、 障がいはどこにあると考えられているのでしょうか？	●例えば、階段しかない車いすでは 2階に上がりません。 →障がいがある 
●エレベーターが設置されれば 車いすでも2階に上がれます。 →障がいが消された 	●この事例の車いす使用者 は何も変わっていません が、周囲の環境が変わっ たことで障がいが消され ました。 
●社会モデルに基づく誰 にでも障がいはあり得る とも考えられます。 	●例えば、高い壁では 2階に上がりません。 →障がいがある 
●ハシゴを持ってくれば、 2階に上がれます。 →障がいが消された (合理的配慮の提供) 	●このように障がいのない方も、周囲の 環境などの社会的障壁次第で、できる こととできないことが変わってきます。 ●つまり社会モデルでは、程度の差があ るだけで、障がいのある方もない方も 同じ前提なのです。 

愛媛県「障がいの社会モデル」より

インクルーシブデザイン

ともに考えるデザインの方法

障害者や高齢者など、これまでサービスや製品でメインターゲットから排除されていた極端なニーズをもった人々(リドユーザー)を、企画や開発の初期段階から巻き込み、内包し、最終的にビジネスとして成り立つものにしていく。

弱者の顕著化されたニーズから、他のユーザーの潜在ニーズの種となるものを発見できるという可能性

「弱者」との共同の目による「世界」への接近

人間社会だけに閉じずに、環境問題へと発展させると、
「弱者」は主として**環境** → 主語へ

気候変動問題 影響を強く受ける**動植物・生態系**を主語に (未来の人間)

「地球温暖化によって、我々には、**生存手段を失う**などのたいへんなストレスがかかっている。絶滅するかもしれない。これをつくりだした人間は早急に**対処する義務**(**選択ではなく**)がある。人間にはエアコンなどの暑さの緩和手段があるが、我々は素の環境のなかに居ざるを得なく、**緩和手段はない**。」

○問題点が明らかになり、何をするかが明確になりやすい。

○問題の把握、対処の仕方において間違いにくい。

○「副作用のある対症療法」をすぐに見分けられる。

- ・暑さの緩和手段であるエアコン vs. 環境には暖房機 (& CO2の排出)
- ・「被災地のため」の食料品の中長期的支援
- ・「子どものため」のもろもろ



主語・主体の2つの種類

(1) アドボケイト

なりきりの主語

「地球温暖化によって、**我々**には、生存手段を失うなどのたいへんなストレスがかかっている。絶滅するかもしれない。」

(2) 私(たち)

私(たち)が大きな主語で、「弱者」がその内部の主語

「**私(たち)**は、『**弱者**』が・・・ことを・・・します。」

「**私(たち)**の役割は、『**弱者**』が・・・のを・・・することです。」

外形的には異なるが、本質的には同じ

アドボケイトも思考回路は(2)と同じ

ただし、なりきりには大きな意味 徹頭徹尾の当事者性、迫真性

(4) 未来も含めた地球の構成員による

民主主義の**実践的意味** ← (1)構成員と(2)可能性・具体化

(a) 「**現在人間中心主義**」 (私の造語) からの脱却

未来や地球全体が関係しているにも関わらず、現在の人間を中心とってしまう傾向

それぞれどういう
議論になるだろうか？



現在の人間を中心とする傾向になりがち



現在の人間を中心とするようになれば、必ず修正が入る

気候変動問題を**バランスよく**

・現在の人間のなかでは年齢による非対称性

未来の人間は、若者がより深刻な影響をより長い期間に亘って受けることの延長

→ **若者の意見をより重視**

(b)現在の人間以外の構成員が主語・主体になることで、現在の人間の問題点を客観視でき、方向性を間違いにくくする。

- ・すでに(3)において本質的な部分について述べ終えている。

- ・「未来の人間」の声 1.5°Cシナリオの代表者

「1.5°Cで止まったが、(2020年頃より)ずっとたいへんな災害が起きている」

「1.5°C未満目標」も現在の人間の都合(否定的に捉えているわけではない)

- ・現在の人間の異常さ(地球のあり方から度外れていること)を客観視

- ・方向は未来の人間が指し示し、「人間以外の構成員」とも調和的

(c)論争となっていることについて解答を見出せる場合も多い。

例：原発問題 二酸化炭素の排出を緩和するため原発を使うことの是非

「未来の人間」の間では意見は一致：「原発の恩恵をまったく受けない我々に

廃炉処理を押しつけ、放射性廃棄物の管理をさせるのはあり得ない」

→ 一致した未来の人間の意見と論争のある現在の人間の意見とを突き合わせ

→ できるだけ早く原発はなくすべきという合意に容易に至るはず



4. まとめ

(1)気候変動問題に伴って民主主義の新しい芽が育ちつつある。芽を正しく捉え、さらに発展させる。

- 科学と政治
- 市民団体の国際政治交渉への関与
- 選挙型代議制に代替する制度

(2) **地球の未来**のための新しい**民主主義**の仕組みをつくっていかなければならない。↔ **現在の人間**のための仕組み

- 現在の人間だけで閉じるのではなく、気候変動に関係するすべて(「人間以外の地球の構成員」など)を構成員に
- 彼らに対してはアドボカシー制度を導入

謝辞

IPCCについて多くをご教示いただいた江守正多氏(国立環境研究所)に感謝します。